

# 「福音主義と歴史・実践」応答

金井由嗣（日本イエス・キリスト教団千里聖三一教会牧師、関西聖書神学校講師）

## はじめに

藤本氏の講演：福音主義における「聖書の無誤性」の位置づけについての鋭い問題提起

プロテスタント正統主義、プリンストン神学、ファンダメンタリズムにおける「無誤性」理解の土台にある「基礎づけ主義」への批判的検討

ギャンブル氏の講演：現代アメリカ福音主義の多様な展開、その中で堅持されているもの

「誤りのない神の言葉」を神学の第一項とする思考について、学問の基本的な方法論に絞って考察する

## 福音主義聖書論の近代主義的性格

19世紀にはじまる神学的運動としての「福音主義」は自由主義神学に対する対抗運動であり、聖書に基づく歴史的・正統的キリスト教がその時代において「学問的」であろうとする努力の表現であった。

啓蒙主義が支配する近代の大学アカデミズムにおいて、学問的（理性的）認識の成立要件は「確実な認識から存在を考える」方法論に限定されていた。この「認識から存在へ」型の方法論を知の体系における「アリストテレス主義」と名付ける。それに対して「存在から認識へ」型の方法論は「プラトン主義」と名づける<sup>1</sup>。

西洋の学問におけるアリストテレス主義はスコラ学において初めて本格的に導入された。しかしトマス・アクイナスにおいては「存在そのもの」「第一原理」である神の存在を特別扱いにしてすべての知の土台とするプラトン主義的前提が担保されていた。

アリストテレス主義の徹底した優先を最初に主張したのはオッカムのウィリアムである。彼が「存在そのもの」である神自身を「剃刀」の対象とすることまで主張していたかどうかは議論の余地があるが、彼の哲学を論理的に進めればその展開は不可避である。

宗教改革期の神学者たちはすべてスコラ的教育によってアリストテレス主義を身に着けており、かつオッカム主義の影響を強く受けていた。それゆえ彼らにとっても知の体系(*scientia*)はアリストテレス的であるべきものだった。

ルターやカルヴァンは神学におけるアウグスティヌス主義者であり、神ご自身については認識を超えた「存在そのもの」として扱うプラトン主義的態度を受け継いでいた。しかし彼らに続く世代、特に神学

---

<sup>1</sup> ここでは哲学史上の大きな潮流を二人の知的巨人に代表させる通俗的理解に基づいて用語を定義している。プラトンとアリストテレス自身の哲学体系がこのような定義に従っていたかどうかは別に検討を要する課題であるが、本日の講演の範囲を越えているためここでは扱わない。

論争が激しく、その論点もより精緻になっていった時代の神学者たちにおいては議論の性質上、よりアリストテレス的論理が優越を占めていった。

学問方法論としてのアリストテレス主義を「すべての」学問に要求することは、18世紀啓蒙の主張であった。この主張はデカルト（正確には、スピノザによって解釈され広められたデカルト主義<sup>2</sup>）に始まる。19世紀にはこの主張はヨーロッパ（特にフランスとドイツ）の大学アカデミズムを支配していた。

自由主義神学は啓蒙主義の定義する「学問性」をキリスト教においても満足させようとする努力の所産であった。そこでは神の存在や神の行為を「確実に認識できる根拠」に基づいて立証することが求められ、神学を中心課題は合理的に立証可能な人間学に還元された。

自由主義神学への対抗運動としての福音主義が大学アカデミズムの中で「学問性」を主張するためには、神についての「確実に認識できる根拠」が必要であった（と思われていた）。「誤りのない神の言葉」はそのような認識論的土台として受け止められていた。これが藤本氏の指摘する「基礎づけ主義」である。

アリストテレス主義の支配下で学問としての福音主義神学を形成するためには「聖書論から神論へ」という方向性が不可避となる。所与として存在し確実に認識可能な「神の言葉」（聖書）に基づいて「神」を論ずるのである。このような神学的構造を福音主義に関する諸表明に見て取ることができる。

その中で第一に、かつ決定的に重要なのが「福音同盟」（1846）の信仰基準である。この基準は本来は（教派的）教会形成の土台となる信条（*creed*）ではなく、神学的体系の表明でもない。自由主義神学に対抗して伝統的信仰を守ろうとするグループの共通項を箇条書きで示したものであり、「聖書は誤りのない神のことばである」との項目が第一項になったことはその本来の目的に照らして妥当である。しかし、特定の教派的信条を持たず「福音主義」ないし「聖書主義」をアイデンティティとする集団（新興の教派、教団、またとくに超教派の宣教団体）においてこの「福音同盟信仰基準」が「信仰告白」または「信仰基準」として（そのまま、あるいは修正を加えて）採用された。具体例としては日本基督公会、日本組合基督教会、日本基督教団の信仰告白がそれである<sup>3</sup>。聖書に関する告白を第一項とするこの型の「信仰基準」を体系的神学の出発点とする場合、「聖書論から神論へ」との方向性を基本とせざるを得ない。この場合、所与の出発点としての聖書に誤りがあっては困るのである。

### アリストテレス主義と相対主義からプラトン主義への転換

学の方法論において「認識から存在へ」というアリストテレス主義をデカルト的に貫徹することは、最終的には相対主義に至らざるを得ない。「他者」や「他者の認識した世界」は *cogito* と同レベルの確実な認識ではあり得ないからである。啓蒙主義の学問方法論は「進歩した人間理性」という共同幻想（プラト

---

<sup>2</sup> パスカルが批判するように、デカルトが「できれば神なしで始めたかった」かどうかは不明であるが、少なくともデカルト自身の議論においては *cogito* と神の存在は切り離すことができない関係にあった。それを切り離して *cogito* を知の唯一の出発点と定義したのはスピノザとそれに続くフランス啓蒙主義者たちである。

<sup>3</sup> 中村敏『日本における福音派の歴史』参照。

ンのアイデア!)を共有している人々においてのみ成立していた。この共同幻想が幻想にすぎないことが明らかになった現代の諸学問を相対主義が支配するようになったのは当然である(ポスト=モダン)。

古典古代(ヘレニズム)末期の思想状況と現代のそれとはきわめて類似している。アリストテレス主義に基づく合理主義と技術主義が勝利を収めた結果として多様な価値観と文化が出合うことになり、結果として人間理性の環境依存性が明らかになり、文化相対主義と個人主義が横行するようになる。哲学は共通知の土台を失って人間学となり、功利的目的を前提とした個人的倫理の追及と現世肯定をもっぱら教えるものとなってしまった。

そのような思想的状況において、「普遍的な真理」を希求する人々に回答を提示したものが古代末期におけるプラトン主義の復活であった(新プラトン主義とキリスト教プラトン主義)。この場合、思考の出発点となる「存在そのもの=神」は人間の理性的認識を超えた存在でなければならず、その「神」を知る神秘的知識がすべての認識の土台として設定される。つまりこの場合のプラトン主義にとって宗教性は必須である。

二つのプラトン主義の競争の結果、キリスト教プラトン主義が勝利を収めた。政治的・社会的要因は当然あったが、思想史的に見ても必然の結果であった。新プラトン主義は神についての哲学的定義を思想の出発点としており、「存在から認識へ」という知の体系を定義(人間の認識の所産)から始めるという矛盾をはらんでいたのに対して、キリスト教プラトン主義は「存在そのものである神」と「神のロゴス」という存在原理を出発点としていたからである<sup>4</sup>。

キリスト教プラトン主義において存在と認識をつなぐものは「神のロゴス」である。このロゴスは3通りの仕方で存在と認識を結び付ける。(1)ロゴスそのものであるキリスト、(2)神の像としての人間に内在するロゴスの種子、(3)神の語りとしての聖書。神についての知識(theologia=神学)は、この3つのロゴスが重なるところにおいて成立する。そして本来、この三者は一致するのである。一致を妨げるものは人間の罪であり、キリスト(ロゴス)による救済が成立して初めて人間理性(ロゴス)は神のみことば(ロゴス)を正しく理解し、そこに啓示されたキリスト(ロゴス)を知覚的にも正しく認識できるようになる。三つのロゴスの完全な一致は救済の完成(終末)において初めて経験されることであって、この世の生においてはなお未完成である。ただ聖霊の働き(エネルゲイア)によって救済が適用された程度に応じて、その一致を部分的に経験することだけが許されている。

## まとめ

以上の考察に基づいて本日の論題を検討する。「聖書は誤りのない神のことばである」という命題が認識論的前提として理解されている限り、我々は近代アカデミズムにおけるアリストテレス主義を克服できない。従ってポスト=モダンの相対主義を超越することもまた不可能である。「聖書が神のことばである」ことは存在論的に理解されなければならない。神の存在が人間理性による論証を必要としないのと同様、聖書の「無誤性」もまた我々の立証や弁護を必要とはしない。と同時に聖書の「無誤性」は我々の認識ではとらえきれない。神に関する我々の知識はなお未完成であり、終末における完成を待望してい

---

<sup>4</sup> この場合の土台となる存在論はギリシャ的・哲学的存在論(オントロギア)でも単純なヘブライ的存在論(ハヤトロギア)でもなく、ヘブライ的存在論のヘレニズム的受容(ハヤ=オントロギア)である。有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』参照。なお、近代認識論の限界に対するプラトンの知識論の意義については、山中良知『理性と信仰』第4章を参照。

る段階だからである。それはまさに信仰「告白」の対象である。また「ロゴスそのもの」であるキリストを知ることなしには聖書を「誤りのない神の言葉」と信じることはできない。したがって「神のことばである聖書に誤りが無いこと」は救済論的・終末論的信仰告白の内容である。

#### （付論または今後の検討課題）歴史的キリスト教信仰の聖書論と近代福音主義の聖書論の連続性

「福音主義」における「聖書の無誤性」理解において、それを近代的理性（啓蒙主義的モダニズム）に合わせて解釈することの問題性は以上の考察において示された。G.メイチャンが主張したように、我々は「福音主義」が自由主義に対抗して新しく生まれた近代の運動ではなく、2000年の歴史を通じて堅持されてきた「キリスト教」本来の在り方であることを主張しなければならない。そのためには、古代キリスト教の伝統に従って「福音主義」「聖書信仰」をとらえなおす必要がある。T.オーデンが主唱する *orthodoxy* の意義はここにある<sup>5</sup>。

学問方法論における「プラトン主義」と「アリストテレス主義」の観点から、以下の諸資料の分析と比較を試みることで、神論と聖書論の適切な位置づけについての示唆を得ることが期待できる。

- (1) アウグスティヌス 『キリスト教の教え』『創世記逐語注解』第1巻
- (2) ルター 『大教理問答』
- (3) カルヴァン 『キリスト教綱要』第1巻第1章
- (4) プロテスタント諸信条（18世紀まで）
- (5) プロテスタント神学書（*loci* など）
- (6) 福音主義諸宣言（19世紀以降）
- (7) B.B.ウオーフィールド 『聖書の靈感と権威』

---

<sup>5</sup> T. Oden, *The Rebirth of Orthodoxy*.